

Posttraumatic Growth (外傷後成長) に影響を及ぼす諸要因の検討

頭 師 有 里

【問題と目的】

強いストレスを感じる出来事に起因する心理的変容はストレスの対処行動とも捉えられ、ストレスとコーピング研究の中で扱われている。Tedeschi & Calhoun (2004) によると、“Posttraumatic Growth (外傷後成長：以下、PTG とする)” は、「非常に困難な人生上の危機、あるいはトラウマになる出来事、ストレスフルな出来事との苦闘の結果として生じるポジティブな心理的変容の経験である」と定義される。Taku et al. (2007) は、日本語版 PTG 尺度 (以下、PTGI-J とする) を作成して、日本の大学生を対象に、体験した出来事からの時間の経過・出来事の種類の衝撃度・性差と PTG との関連を検討している。本論文では、大学生と成人による年齢の比較を中心に、PTG に影響を及ぼす諸要因を明らかにすることを目的とした。

【方法】

2009 年 11～12 月、質問紙による調査を行った。本調査の協力者は、大学生 133 名 (男性 61 名、女性 72 名)、30 歳以上の成人 61 名 (男性 19 名、女性 42 名、平均年齢 41.92 歳、SD = 9.32) であった。

【結果と考察】

PTG と性差および年齢差について 2 要因の分散分析を行った結果、関連がほとんど認められなかった。年齢や性別が PTG に影響を及ぼさないことは、PTG の定義によって説明することが可能であると考えられる。その一方、出来事の衝撃度と宗教観についてそれぞれ 2 要因の分散分析を行ったところ、年齢と性別の影響が若干認められたことから、衝撃度や宗教観における性差が間接的に PTG に影響を及ぼした可能性が考えられる。出来事を体験した時期と PTGI-J について Spearman の順位相関係数を算出したところ、全ての指標間に相関が認められず、出来事から時間が経過すればするほど PTG が多く得られるものではないことが明らかとなった。一方、出来事の体験によってネガティブな感情が生じた状態から新たな道筋を築いたりするためには、ある程度の時間の経過が必要であることが考えられる。また、時間の経過に関係なく出来事の衝撃を想起することが可能であることから、PTG とネガティブな感情が共存していることが推察される。年齢と「聞き手」の存在を独立変数として 2 要因の分散分析を行った結果、「聞き手」の存在が PTG に影響を及ぼすことが明らかとなった。「聞き手」の反応や態度に関して望むことと実際の「聞き手」に差が生じたとしても PTG に影響を及ぼさないことが明らかとなったが、協力者の報告した「聞き手」はすでに「関係性」のある存在と思われることから、「聞き手」との「関係性」が重要と思われる。また、本調査の協力者が出来事を話すときに求める環境は、物理的空間、「聞き手」の属性と態度から作られると考えられる。